

ち待ちて礼む。椅の彼の方に到れば黄金の宮有り。其の宮に王有り。椅の本に三の衢有り。一の道は広く平なり。一の道は草小し生ゆ。一の道は藪を以ちて塞る。蝦夷を其の衢に立てて、一人宮に入りて曰さく「召せり」とまうす。王見て言はく「此れ法花経を写し奉りし人なり」とのたまひて、すなはち草小し生えたる道を示して言はく「此の道より將よ」とのたまふ。四人副ひて熱き鉄の柱の所に至り、彼の柱を抱かしめ、編みたる鉄を熱く焼きて、背に著けて押し、三日夜を歴。銅の柱を抱かしめ、編みたる銅をはなはだ熱くし、背に著けて押し、また三日を逕。極りて熱きこと燻の如し。鉄と銅と熱しといへども、熱きにあらず安にあらず。編みたる鉄重しといへども、重きにあらず軽きにあらず。悪しき業に引かれ、ただし抱き荷はむと欲ふ。合せて六日を歴てすなはち出づ。三の僧蝦夷に問ひて言はく「汝此の意を知るやいなや」といふ。答へていはく「知らず」といふ。僧また問ひて言はく「汝何の善をか作ふ」といふ。答へていはく「我れ法華経三部を写し奉る。ただし一部のみいまだ供養せず」といふ。札を三枚出す。二枚は金の札にして一枚は鉄の札なり。また斤を二枚出す。一枚は重くして稻一把を倍し、一枚は軽くして稻一把を減す。時に僧言はく「札を校ふれば、実に汝が白す如くなり。三部の法花大乘を敬写

すなり。大乘を写すといへども、重き罪を作る。所以は何に。汝斤二を用て、出挙の時には軽き斤を用、債を徴る日には重き斤を用。故に汝を召す。今は忽に還れ」といふ。還来ること前の如し。多の人等を以ちて道を掃き、椅を作りて言はく「法花経を写し奉りし人閻羅王宮より還来るなり」といふ。彼の椅を度り畢り、纒見れば甦還る」といふ。然うして彼の写せる経を戴ひて、ますます信ふ心を発し、講読みて供養す。誠に知る、善を作れば福来り、悪を作れば災来る、善と悪との報終に朽ち失せず、並に二の報を受く、ただし専善を作へ、悪を作ふべからず、と。

寺の物を用また大般若を写さむとして願を建てて現に
善と悪との報を得る縁 第二十三

大伴連忍勝は、信濃国小県郡嬢里の人なり。大伴連等心を同じくして、其の里の中に堂を作り氏の寺とす。忍勝大般若経を写さむが為に、願を發し物を集め、鬢髪を剃除り袈裟を著、戒を受けて道を修ひ、常に彼の堂に住む。宝龜五年甲寅の春三月に、倭に人の讒を被りて堂の檀越に打ち損はれて死

一 冥界の王の居処。「金宮」(上巻三十縁)、「樓閣宮」(中巻五縁)、「重樓閣」(下巻九縁)などと類似する。
二 本説話にみえる王には名がつけられていない。閻羅王と解すべきではない。下文にみえる從閻羅王宮「還来」の「閻羅王」は、中巻七縁における「閻羅状」より推せば、閻羅という名の冥界の王宮、と解する余地がある。
三 冥界の歧路が叙述される例に、法苑珠林・六度論精進部・感応緣所引冥祥記・僧規三歧路、同・六度論・懺悔部・感応緣所引冥祥記・慧達齋、太子瑞心本起經・上三三三三之圖「などがある。いづれも武人が登場し、進むべき道を指示している。
四 中巻七縁。
五 網状にしてあるのである。雜藏經に「熱鉄籠」とみえるものと同一か。
六 原文(合巻六日)「乃出」。上文の「死経七日」と合わせて考へるならば、最後の一日で蘇生、ということになる。
七 本説話においても下巻二十三縁においても、この三人の僧は「汝作何善」という問いを發している。仏教的な善行の有無によつて死者を裁く者であるが、この冥界の主宰者ともみえない。
八 僧が裁きの資料として札や斤をもち出してきたのであろう。生前の所業の記録にもついで死後審判がおこなわれる、として、辻英子は、オデュッセイア、ヨハネの黙示録、コーランの伝承との類似を指摘する。しかし、本説話および下巻二十三縁にみえる札は、そこに文字が記されたものではなく、より抽象的に所業の善悪を示すものとなつてゐる。法華伝記・九・法華には、閻羅王庁の裁きの場に「罪福札」が記される。

一 菩薩内戒經の四十七戒に二十八者、菩薩不得持、重称、侵人、二十九者、菩薩不得持、輕称、欺人、とみえ、雜藏經に「汝前世時、作市合、常以輕称小斗、而写、重称大斗而取、常自欲得大利於己、侵、刈余人」とみえるように、一種のかりを使ひわけることは仏教においても悪とされた。
二 原文「所以者何」。仏典語。たとえば妙法蓮華經・方便品にみえる。
三 展開が唐突である。
四 帰途は同じ経路を逆に進んでいる。
五 「纒」は、「すると同時に、の意」。

第二十三縁 善業と悪業についての現報説話。今昔物語集十四ノ三十に書承。
一 大般若波羅蜜多經。六百卷。
二 未詳。本説話以外に所伝をみない。
三 長野県小県郡、上田市あたり。
四 大伴連一族の尊崇し祈願する寺。
五 七七四年。

六 施主。堂の維持のために経済的に力をつくす人。氏寺であるから大伴連一族が檀越である。

ぬ檀越はすなはち忍勝の同属なり。眷属譲りて曰はく「殺人の罪を断らしめよ。故に輒く焼き失はず」といひて、地を点めて冢を作り瘞り収めて置く。死にて五日を歴てすなはち甦り、親属に語りて言はく「召す使五人、共に副ひて疾く往く。往く道の頭にはなはだ峻しき坂有り。坂の上に登りて躊躇ひて見れば、三の大きな道有り。一の道は平にして広し。一の道は草生えて荒る。一の道は藪を以ちて塞る。衢の中に王有り。使白して言さく「召せり」とまうす。王平なる道を示して言はく「是の道より將よ」とのたまふ。王の使衛み往く。道の末に大なる釜有り。釜の湯気焰の如く、涌沸くこと波の如く、吼鳴ゆること雷の如し。すなはち忍勝を取りて、井と彼の釜に投る。釜冷えて破裂れて四の破と成る。爰に三の僧出で来り、忍勝を問ひて言はく「汝何の善をか作ふ」といふ。答へていはく「我れ善を作はず。ただし大般若経六百巻を写さむと欲ひき。故にまづ願を發していまだ書き写さず」といふ。時に、三の鉄の札を出して、校ふれば白すが如し。僧告げて言はく「汝実に願を發し出家し道を修ふ。是の善有りといへども住める堂の物を多用る。故に汝の身を摧くなり。今還りて願ふことを畢へ、後に堂の物を償へ」といふ。纒放たれて還来り、三の大きな衢を過ぎて坂より下りてすなはち見れば、甦返る」といふ。

斯れすなはち願を發したる力なり。物を用し災は、是れ我が招ける罪なり。地獄の咎にあらず。大般若経に云はく「おほよそ錢一文を二十日に至りて倍さば、一百七十四万三貫九百六十八文に倍して在らむ。故に竊に一文の錢すら盗み用ることなかれ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

四 修行ふ人を妨ぐるに依りて猴の身を得る縁 第二十

近江国野州郡の部内の御上嶺に、神の社有り。名けて陀我大神と曰ふ。封六戸を依せ奉る。社の辺に堂有り。白壁天皇の御世の宝龜年中に、其の堂に居住める大安寺の僧惠勝、暫頃修行ふ時に、夢に人語りて言はく「我が為に經を読み」といふ。驚き覚めて念ひ怪ぶ。明日に小き白き猴現れ来りて言はく「此の道場に住みて、我が為に法華經を読み」といふ。僧問ひて言はく「汝は誰れぞ」といふ。猴答へて言はく「我れは東天竺国の大王なりき。彼の国に修行僧有り。従者の数千なり。所以に農業怠る数千といふは、千余の数を数千と云ふなり。因りて我れ制めて言はく「従者多くあることなかれ」といひき。其の時

一 殺意なく闕段して人を殺したばあいは絞、刃を用いて人を殺したばあいは故意に人を殺したばあいは斬(調法律および疏)。忍勝を殺した檀越を断罪するための証實保存が必要なのである。二 ↓下巻二十二縁。三 ↓下巻二十二縁。四 ↓下巻二十二縁。下巻二十二縁と本説話とは同じひとつの冥界でおこつた異なるふたつの事件を説話化したもの。五 本説話にみえる王には名がつけられていない。閻羅王と解すべきではない。六 中国説話の世界では、冥界の歧路が叙述されるばあいでも、その歧路がどのような状態なのか、岐路のひとつに平坦な道が含まれているのかいふの、記されはしない。七 ↓一坂扉、岸下見、有、鑿湯刀劍楚毒之具、心時悟(是地獄)法苑珠林、奈洞、感心縁所引冥祥記(張心)という例もあるが、道の終着地点に釜が沸きたっている、と述べられるのはめずらしい。八 底本訓積(井(并か)ツハト)。二 井は、井の中に物を投げ入れたときの音をあらわす文字。九 ↓續一は、一すると同時に、の意。三 原文即見。見ると同時に、の意。四 この引用文は大般若波羅蜜多經にみえない。五 第一日に一文、第二日に二文、第三日に四文、第四日に八文、というぐあいに毎日二倍にしてゆくならば、第二十日には五二四二八八文となる。本説話の「一百七十四万三貫九百六十八文」とは大きく相違する。記数法に少々問題があるが「二百七十四万三貫九百六十八文」は「七四三九六八文をあらわすか(一貫は一千文)。五二四二八八文を二貫をひとまとまりの単位のように考えて記すならば、一七四×二貫十二二

八八文となる。本説話は、これをあらわす表現を誤写したか。

第二十四縁 神が罪の報いの身である、とされ、仏の優位が示される。扶桑略記・光仁天皇条に引用。

五 滋賀県野州郡。一六三上山。
 六 延喜式・神名帳に、近江国野州郡に御上神社がみえる。現在の御上神社である。本説話によれば御上神社は陀我大神を祭っているが、延喜式・神名帳にみえる近江国犬上郡の多何神社(現在の多賀大社)との関係は不明。神祇正宗に内裏三十番神を述べて十八日の箇所に「三山上か大明神」をあげ、「今ノ多賀大明神、本地ハ伊弉諾尊也」としている。
 七 神社を經濟面から支えるための封戸。神戸、神封という。その戸より納める調、庸、田租が神社の建造や調度などであつた神祇(念)。新抄格勅符抄に、天平神護二年(天喜)に「田鹿神(六戸)とみえる(松浦直俊。下文に典主の横領が述べられる。ここに「封六戸」が特記されるのはその伏線である。元七七〇一七八一年。

八 本説話以外に所伝をみない。
 九 三本書では、動物が人のことを發するばあいに、夢の中、と設定される説話(中巻十五縁、中巻二十二縁)と、設定されない説話(上巻十縁)とがある。いずれのばあいにも、その動物の發言内容の虚実が検討され、その動物の行動のことばを發しているが、惠勝はその動物の發言内容の虚実を検討することなく信じている。満預は信しない。白猴の發言内容を信じていると信しないとの差は、夢をみたのと夢をみてい